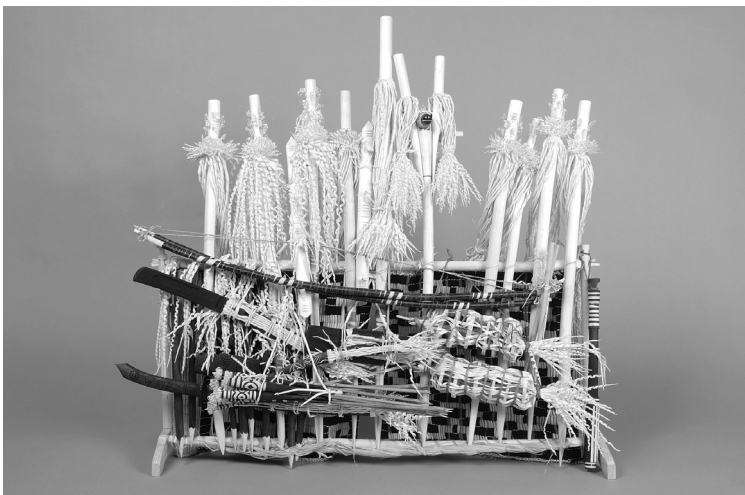


国立民族学博物館の収蔵品①

二つの祭壇



クマ送り儀礼の祭壇（再現）



クマ送り儀礼の祭壇模型（複製）

「アイヌの文化」展示場を三十七年ぶりに大幅リニューアルし、今年、二〇一六年六月十六日に公開した。新展示には、二つのクマ送り儀礼の祭壇がある。一つは実際の儀礼で使うものと同じように再現され、もう一つは東京大学旧蔵の戦前に作られた古い模型の複製である。アイヌの信仰では、あらゆるものに靈魂が存在すると考え、なかでも生活との関わりが深く、人間を超える力を持つ強いものをカムイとして敬意を払ってきた。人びとにとって動物を獲ることは、その魂を人間界に客人として迎え入れ、肉や毛皮などのみやげをいただくことであった。その魂の再訪を願い、カムイの世界に旅立たせるのが送り儀礼で、特にクマ送り儀礼は盛大かつ厳粛に行われた。

実物大の祭壇は、一九九二年に北海道平取町二風谷の萱野茂・れい子夫妻と藤谷憲幸氏によって、民博の展示のためにつくられたものである。高いところで二メートル以上、幅は三メートルを超す。マネキンと比べていただと、その大きさをおわかりいただけるだろう。萱

野茂氏はアイヌ文化の研究・保存継承・普及に大きな功績を残し、アイヌ民族初の国会議員となった人物である。展示室には、萱野氏はじめ二風谷の人たちによってつくられた伝統家屋「チセ」もある。これまでの展示では、祭壇は少し離れた壁面に展示されていたのだが、今回のリニューアルで、祭壇は少し離れた窓に面した本来の配置に移動した。再展示は、萱野氏の孫・公裕さんと藤谷氏の子息・誠さんに立ち会ってもらい、故人となった祖父と父に代わりカムイノミ（カムイへの祈り）を行っていただいた。

もう一つの祭壇は、模型の複製なので高さ・幅ともに八〇センチあまりで、ガラスケース内に展示している。国立民族学博物館には、開設後まもなく東京大学から約六二〇〇点の資料が移管され、そのうちアイヌの資料は約八〇〇点ある。明治半ばに同大理学部に創設された人類学講座では、アイヌの研究を入れ、衣食住や儀礼に用いるものなどさまざまな資料を収集した。このとき、大き過ぎて運搬や収蔵

ができない家や船、また、譲ってもらうことができない神聖な祭壇などは、模型をつくらせてそれを収集したのだ。

この複製の元となった資料は、昭和初期以前に収集されたものだが、傷んでばらばらに保管されていた。二〇一一年の特別展のときに、この資料を何とかしたいと北原次郎太氏（北海道大学アイヌ・先住民研究センター准教授）に相談したところ、古い資料をじっくり調査して同じものをつくるのは、勉強になると判断され、北原氏とアイヌ文化伝承者育成事業の研修生五名によって複製がつけられたのだ。

いま、世界的に先住民族に関する展示は、立案から収集・設計・演示にいたるまでその文化の担い手と共同で行うようになってきている。アイヌ民族としてのアイデンティティをもつ博物館職員や研究者も増えつつある。若いアイヌ文化継承者の手によって、二つの祭壇は新たによみがえった。

（齋藤玲子）